# 小笠原島紀事　十


和書門　類
二九三四五　號
二三七　函
一　架
三三　冊

内閣文庫
和書　類
二九三四五　號
三三　冊
一七三　函
一四　架

地

内 一〇八八八號

| 内閣文庫 | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 | 29345 |
| 冊數 | | 33（10） |
| 函號 | 173 | 181 |

国立公文書館 National Archives of Japan

八
従文久元年十一月十日
至同年十二月二十日

校了 六月廿七

# 小笠原島紀事巻之八

内一〇八八八號

## 目録

文久元年下
○十一月十日開拓ニ付亞英兩公使報知書翰贈達之申稟
○同日勘定監察兩屬吏數名隨行之下令
○同日監察屬吏隨行之下令
○同十一日外國奉行同屬吏等於江戸小笠原島事務兼帶之下命
○同十三日小笠原島開拓碑文造建之申稟

○同許可指令
○同十四日八丈島漂民呂具之申稟
○同十六日亞英兩公使ヘ開拓報知書翰
○同十九日亞公使右回翰
○同日小笠原島ヘ本草學者召具申翰
○同許可指令
○同廿日亞書記官ヨリ立石斧次郎ヲ召具許容
請求之来翰
○同日齋藤源藏隨行下令
○同廿一日小通詞堀一郎召具之下令

○同廿二日忠德常純軍艦奉行連署シテ携帶金
申稟
○同指令
○同廿三日譯官森山多吉郎ヘ亞書記官ヨリ来
簡並小笠原島在民セフシヘノ贈達書小笠原
島地理行聞
○同日天秤並權衡度量携帶之申稟
○同廿四日捕鯨開業申稟書
○同廿四日忠德注視書
○同廿六日副船千秋丸出帆期限並帆綱增加之

○申稟

○十二月日時未詳譯士森山多吉郎ヨリ亞書記官ヘ
十一月廿三日来翰回答

○同二日去月十九日亞國公使ヨリ来翰回答

○同日千秋丸乗組軍艦方数名ヘ下令

○同日用意金携帯申稟不許可

○同日委任状授與

○十二月三日忠徳常純以下乗船品川海ヲ發帆

○航海船及困難等之概畧

○同十九日父島着船上陸顛末

○同日外國方監察方屬吏島民面晤

○假官廳補營

○忠徳始一座セーボレホーツン對話

○同廿二日洲崎村ウエブ共外島民数名對話

○同廿七日奥村セーボレヘ面會開拓之大意對
話

○同廿八日於大村再セーボレショージヘ右同
断之旨對話

○十二月十五日於江戸小笠原島豫備船再議申
稟

○同指令

○同十九日鯨漁船ヘ小笠原島航入用諸品積入申稟許可

○同廿日諸品宰料集組申稟

○同日外國奉行支配於江戸小笠原島事務兼務之下令

○同日再應用意金携帯申稟

○同許可指令

内閣文庫

小笠原島紀事巻之八　内一〇八八八號

小笠原島ハ方今外國人来往ノ地トナリ加之英国政府ニテ同島ヲ領屬ト為スノ内議アリト聞ユ其形勢事情知何トモ計難ク其等ノ處分ハ勿論總テ忠徳ガ注視ノ件々且発向ノ際ニ臨ミ各国在留公使等ヘ今般開拓トシテ官吏渡航ノ報知アランヿヲ建言セシカドモ閣老其言ヲ容レズ外国奉行ノ談判然ルベシト指揮ス尚同十一月十日忠徳常紀連署シテ大和守久世廣周ヘ申稟再議ヲ請フ

小笠原島開拓之儀ニ付亜英公使
江被差出候書簡之儀ニ付相伺候書付

水野筑後守
服部帰一

今般小笠原島再度御開拓ニ付、水野筑後守始免
役々右為御用被差遣候儀ニ有之、依而同島之事
者外国人ニ而も近年移住致居候由、彼方著書数多
見仕居、其多分者難破船等ニ而漂着仕候者或者南
島夷人等ニ而別段所轄無之もの其之招ニ而算候へ
とも兼而英国政府ニ而同島領属ニ被致候目論見

も有之候由其当今之場合如何招之姿ニ而居
候哉も難斗有之事ニ付所差振筑後守より見込之
趣申上且此立間際ニ而者各国在留公使へ御達ニ
御座候哉相申上候処私共ニ而談判可致旨被仰渡候
昨年来再三勤務仕候処右之儀者一ト通り談判
之上も事替り御国体ニ而不容易御関係も有之候
手初免之御都合振其自後御談判之根拠とも相
成候事ニ付筑後守ニ口上ニ而引合候より其御手勢
横浜より御使出輪被仰達候方可然同役共と
も申談候而何も同意ニ付再應此段申上候依之

右書類案取調此段奉伺候以上

酉十一月

同日勘定吏深山宇平太徒目附佐藤真一郎松本三之丞小人目付林和一郎等ヘ伊豆国附島々其外ヘ派出ヲ下命ス

同十一日外国奉行越中守大久保忠寛同支配組頭白石忠太夫同調役田中廉太郎同定役杉田晋輔同心山崎龍太郎同書物方出役坂本三郎等各江戸ニ於テ小笠原島ノ事務ヲ下命ス

同十三日小笠原島ニ碑文造立ノ事ヲ伺フノ書ヲ信行ニ進達ス同十五日指令アリ

小笠原島へ相達候碑文之儀ニ付申上候書付

水野筑後守
服部帰一

今般私共小笠原島開拓為御用被差遣候而者同島事者既国人共い満た移住之もの有之尚時外国人共而移住仕居候ニ付此彼我所属之差別殊揮く分り兼候ニ付ても往古小笠原民部太輔初之見出

候節

権現様上意之趣ニ寄り御属島之趣木標建置後延

宝ニ巡見之者乃

太神社取建置候、先蹤も有之、彼是ニ而も小笠原島無

人島与申比方之称呼襲用仕候事郎ち何等之現說

ヨリ御国属島ニ紛無御座候へとも、後来ニ至り

何拒之議論可有之も難計、就而ハ彼地到着之上今

般ハ石標ニ立、右等之始末認取候文章ニ彫付候招

仕候ハゝ、当時ハ勿論後来之確拠ニも相成可申哉ニ

存候、右可然被思召候ハゝ、碑文之儀ハ取調、追而相

伺候拒可仕奉存候、依之此段奉伺候、以上

酉十一月

覚

伺之通ニ而必碑文早々取調可被差出候事

同十四日八丈島ノ漂民ヲ用使ノ為小笠原島ヘ召連

ン事ヲ請フ

咸臨丸御船ヘ為乗組召連候八丈島
漂民之儀ニ付申上候書付

御勘定奉行ヘ同外　水野筑後守
服部帰一

先般八丈島ゟ御当地ヘ漂流致し候者乃十四人之

内同島年寄仙次郎并水夫六人之今般咸臨丸江
而帰帆仕度願出候旨江川太郎左衛門手代之者共
より申出候ニ付勘弁仕候処右仙次郎儀ハ八丈島江人
民共引移方成候節同島人気習俗等も心得居且何
角諸周旋ニも居成且水夫六人之義船中立働之外ニ而
手伝之相仕候而都合可宜ニ付右此度右仙次郎外
六人而乗組召連候相仕度奉存候右之趣諸勘定
奉行江も被仰付可被下候以上

戌十一月

同十六日再應建言其請フニ任セ閣老連署ノ書翰ヲ
英亜両公使ヘ贈ル其書左ノ如シ

貌利太尼亜特派公使全権
ミニストル エキセルレンシー
ルーセルホールトアールコツクヘ

以書翰申入候我南海属島中小笠原島ハ航海要中
絶之處今般外国奉行水野筑後守目付服部帰一郎
差遣し追々開拓之挙ニ及ハんと決然ニ候依而者
難斗候得共近来貴国人移住之者も有之由傳聞致
し候ニ付爲念申入置候将又其譯之

文久元年酉十一月十六日　久世大和守花押
安藤對馬守花押

亜米利加合衆国全権ミニストル
ヱキセルレンシー
トウンセントハルリス江

右同文言

同十九日亜米利加公使ヨリ去ル十六日所贈ノ閣老連署ノ書翰ニ回答ス

第百二十六号

千八百六十一年第十二月十九日江戸合衆国使官舘ニ於て

合衆国事務宰相等ゟ

久世大和守
安藤對馬守
各台下ヱ呈ス

余謹て十一月十六日第十二月十七日附之台下之書翰を落手せし所以を告く其書を以て台下小笠原島即ち無人島を再ひ領する為め同島へ人員を差遣し給はんとする所以を熟知したり

余外事を知らしめ為め余り政府より台下之書翰之写を送るへし而して其命令を待つなり

然れとも余亜米利堅国之商民此島中より謀る所之諸免許を保持することを承諾有らんことを請ふ也と懇願し恐惶敬白

日本在留合衆国のミニストルレシデント

トウンセントハルリス手記

同十九日小笠原島へ本草學者渡航ノ事ヲ信行へ就テ伺書ヲ進達ス同廿二日指令アリ

伊豆国付島々之外へ罷越候ニ付本草学相心得候もの召連候儀ニ付伺候書付

水野筑後守

服部帰一

栗田万次郎

松平伯耆守家来

右之者本草学厚心懸ヶ漢蘭学ニ出来人物ニ候ニ付此度私共伊豆国付島々之外へ召連越候ニ付同島中生産之草木等為取調も行届候間差加へ申度尤右万次郎義右伊豆国附島々之内ニ而雇被仰付私共手ニ附為相働候様松平伯耆守へ被仰達被下候様仕度此段奉伺候以上

酉十一月

覚

松平伯耆守家来　栗田万次郎

右者雇被仰付伊豆国附島し并小笠原島へ為御用外国奉行水野筑後守殿同役服部帰一郎相越候節ハ被差遣候間無障様被相心得候事

右之通松平伯耆守家来へ相達候間得其意可被談候事

同二十日先是小笠原島渡航通辨ノ為方今亜国公使館通辨立石斧次郎ヲ召具セン事ヲ請求セシニ本日同館書記官ホルトメンヨリ左之書翰ヲ外国奉行ニ贈リ来タス

千八百六十一年第十二月二十日江戸合衆国公使館に於て

外国奉行諸君足下に呈ス

余亜墨利加ミニストルの命を奉して足下に左件を敬告ス」ミニステルハ足下之舎人島行に付き立石斧次郎を此公使館より去らしむる請求を熟考したり然るに斧次郎乃此公使館に居るハ従来甚要用にして今も尚要用なりし故ハミニステル」彼を去るを以て

萬事を理解し以く良なきハあり是に由く迷誤を
防き難事を避け且ツ双方乃労煩を省くし」ミニステル八
斧次郎ヵ通詞となりて此公使館に来りし以来乃
めくまた首而御扶なりしをを覚へ以又彼ら乃立
るを申しかぬ用ゆなるを覚へあり
ミニステル八存にも力乃及ぶだけ足下乃用便となるべ
き諸事をなさんを希ふと雖も此足下乃請求には応
し難きを説きり○然とも足下乃意人島に行きて事
を便し易からしむるが為には若し足下之をもひ強
ひて「ミニステル」此地に居留する亜墨利加人に書対乃書
簡を贈るへし此乃如くなさしむ然ハ彼方乃諸難事ハ総
而之を防くへし恐惶敬白
ミニステル乃命を奉じく
アルセヽホルトメン

同日西九火ノ番齋藤源蔵忠徳常純ニ随従シ小笠原
島渡航ヲ下令ス

同廿一日英語小通詞末席長崎人堀一郎通辯トシテ
渡島ヲ下令ス

同廿二日忠徳常紀并軍艦奉行信濃守井上清直摂津守木村喜毅等連署ノ書ヲ以テ小笠原島携帯金請求ノ事ヲ建言ス先是軍艦方用金八万枚携帯ヲ請フ政府許サス因テ今日再応ノ建言ニ及ヒシ也

伊豆国附島外一島御用被仰付候ニ付
用意金請取方之儀再應申上候書付

水野筑後守
井上信濃守
木村摂津守
服部帰一

私共并支配向之者伊豆国附島々并小笠原島開拓御用として被仰付候ニ付用意金として通用之分銀弐朱金ニ而壱万両洋銀三万枚御軍艦附用意金洋銀八万枚御請取候様仕度旨申上置候処右開拓御用之方ハ通用一分銀五千両洋銀五千枚御軍艦附用意之方ハ洋銀五千枚御渡之積被仰渡御承知候へ共移民へ被下候品并表御ひらき相整御請取候ニ付而ハ猶三千両御下ケ之儀追而申上候位之儀ニ而島々順見仕候ニハ御取締向之申諭島民撫育方其外差含米金品被下候積兼而伺置候積も有之且小笠原島へ御請取候上ハ居留罷在候外国人等も有之候得共兼而伺済之通取扱此方移民とも十分生活相遂彼方之者共も優劣無之様ニ而相救候半而ハ鎮令開拓御手当候とも多分之費行届不申都合之場合ニおよひ候節ハ意外之儀ハ届申候とも難

申立候手当筋十分ニ不仕候而ハ不束儀ニ有之候處同
意金手薄ニ候ヘハ無援兵傳帰帆之外無之尤右彼夫萬一
申上候通英亜ニ其外諸国ゟ該ノ手入無之内ニ手を付申候即時何
掛ヶ度之開拓ニ而及ヒ難キ其節ニ至り候而ハ後手後之
上之儀ニ而後ニ相成候取扱方容易ニ難来兼一ツ申且一旦帰
帆尚又罷越候仕付候而ハ往返多く相嵩無益之儀
費ニ相成候間不都合之儀ニ而有之上者上絶海之孤島
ニ而風浪烈敷難船之儀ハ定而風之折柄ニ中何等之国ニ而も
漂着可致も難斗其節ニ至り該国之貿易も志ノ通用も
被為遊之洋根而候得而も有之て扶助を受候而外有之

罷成今般同島開拓之大意御共ニ而軍艦を以渡海差出
候知同意金高手薄ニ而兵共ハ兎も角も該国體ニ而有り
如何之有之式ニ付万一外国へ漂着いたし候ハゝ右開拓之儀ハ
無之候而ハ先々之扶助を受候而ハ右無之候而ハ難更之事ニ
有之候一体今般該開拓被仰付候得共乃其志不死生難顧海上
之険阻を凌き絶島へ渡航仕候儀ニ付尚帆之上ハ一同覚
悟を極罷在候儀ニ候ニ付其者共一命之次第ニ有之
候而ハ乗組之者共拿捕ニ抱り自然該国向差支候り
宜敷御座候而ハ武器急仕候而何迄も寛恕被成候申上候通
該渡方ニ付候而ハ拓仕度者共等該入用者本之為兎も勘定

方立合をも申上候儀ニ付御使候処御手当金高等も御案
御勘弁之儀も被為在候ニ付伊豆国附島々当今之姿ニ而変革
之儀ニ付夫々御勘定奉行吟味役等をも被差遣候様仕度
奉存候依之私共申談此段再應申上候以上

酉十一月

覚

再應被申出候趣も有之候小笠島民撫育移民
御手当筋且非常為用意をも分限試米金取交壱万
両洋銀三万枚御渡一ヶ年分候事軍艦方非常用意之儀
被申立之通ニ候御渡御範をも及洋銀三万枚御渡一ヶ年分
候写台仕掛節臣細所調帰府之上申渡候様可致
候事

同廿三日ホルトメンヨリ譯官森山多吉郎ヘノ書翰
ニ小笠原島在留亜国人子ナテニールセーボレ（書翰訳文子デニールセウリニ作ル）ヘ未封ノ書翰及同島測量新聞紙ヲ附シ贈
リ来ル是立石斧次郎ヲ請求任セサルヲ以テ巡視ノ
官吏紹介ノ為ニ所贈ナリ
千八百六十一年第十二月二十四日江戸合衆国使臣
欽

森山多吉郎君に

余足下に開封之侭一ノ書翰と「ニウヨルク」出版の二枚の新聞紙とを是の書と共に贈る是ぞ余人島に住居しある
「ナタニールサヘレー」に贈れる者なり此人は余か所にて
逢て面会せし人なり且余足下之信切なる媒にて因て筑
後守へ宜しく此書簡并に新聞紙を其人に渡す事を若く
思はん事を希ふ

余共に足下に板行せし一冊を贈る是近き頃の澳の合衆
拘はるものにして其用務に供せるを願ふ

余自ら其島に到りて交ある事は故余か為に其嶋への航海
は甚危なり故に極めて用心せるべき事を属する事に
馴れし士官及び水客より聞知せり之を足下に説くは
悪からざるべし 敬白

アルセホルトメン 手記

千八百六十一年第十二月廿一日
日本江戸にある合衆国使臣館にて

君

千八百五十三年第六月水師提督ペルリ軍艦にて航し其
人島にいたりしとき余某書記官にてありしことを
記し以てしらん足下にいたし安康にていまにあるを「ロイト滝

居住乃長まていまきそ也推思し日本乃蒸氣官船ニ乗
日本乃縉紳そ乃官位高貴ましてく人となり最も好良
なる水軍之後守其島ニ巡行乃挙あるまゝり之を厚意ニ
て近比此地まおゐて頒し新聞紙ニ寫を足下ま贈寄し
足下もし余に書寄せんを欲し給ハ余を思ふ乃事ありな
ハ即也くもまこ足下乃命を奉せる事あらんたく余ハ足
下乃教を仰望せる乃ミ

於も人嶌ロイト滝

足下の従僕

ア、エル、セボルトメン

予デニールセウリ居

グレートレウセウ嶌ニ在ル

ウーンテング港一名メルヒレ港

ウーンチング港ハレウセウ嶌隅ノ北西ニ在リテ
ナハ地名ヨリ大概三十五里隔リアリ
著シキ堺界ヲナス「コウガルローフ嶋ハ其港口ヨ
リ大概十二里西北ニ在リ此島ハ東方ヘケーゲル
形狀ニ其高サ百フート尋ヒアルナリ此高處ヲ除

ク外ハ低クシテ平地ナリ
シウガルローフ島ノ北部ヲ過キテ其東南ニ於ル
東道ハ港口ニ通シ且ツ「クーイ島ノ北及ヒ西ニ通
ズト覚ユルナリ○碇ハ二十或ハ二十五ハーデム
ノ深サニ及ブナリ故ニ其乗筋ニ傍フテ船ヲ碇泊
シ得ベシ然レ𪜈ヨキ案内者有ニ非ザレバ幅廣キ
船ハ其乗筋ノ間ニ船路ヲ取ルヿ甚タ難シ其故ハ
碇綱ノ長間ノ場所常ニ浅所モ乗筋モ潮水満チア
リテ覆ヒアレバナリ
此乗筋ノ側ニ両頭アル岩石多ク簇生シテ地図ニ
就テ見ルベシ東ヨリ三十七度南方ニ在リ
○此乗筋ヲ航スルニハ東ヨリ一又四南方ノ燈明
臺岩ニ傍フテ乗筋ヲ取ルベシ燈明臺岩ヨリハ東
方ヨリ四十九度南ニ傍フテ「コンテ岬隅ニ至ルベ
シ此コンデ岬隅ヨリウーンチング港内ニ乗リ入
碇ヲ下スベシ
○汝ノ船コンデ岬ノ北ニ於テ帆ヲ上ゲント欲ス
ルトキハ動揺ニ堪ヘザルベシ而シテ汝等茲ニ圍船
場ニ於ル如ク安静ヲ欲スナルベシ且ツ陸地ニテ
圍屏シアリテ碇泊ニ冝ク常ニ大風ヲ避クル場ヲ

欲スナルベシ
清水ハウーンチングノ街中ニ湧出シアリ
船将ムヽセヽヘルリノ命令ニ因テ合衆国軍艦副
○将シテス、ベレト之ヲ測量ス

サラトガ船名及ヒ「スユスケーハンナ船名船ノ測量家
マゲカン人名及ヒ「ベンチ子ツト人名西人ニ因テ為セル
無人島ロヱード港ノ實驗説
無人島ノ一ナルペートル島ノ西方ニ在ルロヱート
港ロハ誤ル可カラナル如宜シク定リアル

船ヲ乗リ入ラント欲スルニ其船若シベーセイ港ニ在ルキハ「スクワレ礁ノ西隅ヨリ南方ニ向テ其海濱ヲ廻リ乗リ入ルベシ○此海濱ハ高キ所ヨリハ容易ク見ユ然レモ其所敢テ高岸ヲ為スニ非テス○其濱ハスクッレ礁ヨリ南方ヘ碇綱ニ箇長ノ廣サアリ而シテ築礎シアリ
海濱ノ中部ハ濕地ニテ低ク殆シト海面ニ等シ○其潮ハ大概ニフートノ高サニ至ル而シテ北所ニ珊瑚ノ岩アリ是レハフートノ満潮ニ至ル南隅ノ北方ヨリ北ヘ碇綱一箇ノ際ニアリ

○然レ圧乗リ入ル丶船ハ實ニ南隅ニ近ツキ其礁
上ニ至ラザルヿヲ欲ス○圍繞シアル此島ハ殊ニ
鯨猟船其生産物ノ為ニ船ヲ寄テ其缺乏品ヲ求ム
ルナリ○土産ノ果物蒸餅母ヲ製スル根及ヒ其他
植物諸種ノ果類并ニ野猪野牛ノ類ハ此所ニ三十
五年以来移居セルサントイッ嶋人及ヒ白人ヨリ
求メ得ベシ○樹木ハ蔟ニシテ繁茂セリ水モ多ク
有リト雖モ其珊瑚岩邊ヨリ湧出スル水ハ悪ク損
敗シアリ

碇泊所ハ南西ニ開キアリテ甚タ善ナリ○船將ノ
命令ニ因テ為セル痩索ハ曽テ船長ベーシー」著ス
地図ニ本ツクナリ

シエスケーハンナ船ノ測量家ベン子ット氏説テ曰
クベーシー氏改正ノ地図ニ因リテ「グレートロウ
カウ島ノナハ港ノ位置ヲ考フルニ我時計ニ因リ
テ「ロユイト港ニ於テ試験スルニハトムホレ洞ノ名
方ヘ五里距離西方ニ位置シアリト故ニ全嶋ハ其
信正ノ位置ハ述フル如クニ位置シアリト

船将ム、セ、ペルリ」ノ命令ニ因テ合衆国運艦副将シ
ラスベンシト氏千八百五十三年第十月第一日媽港

二於テ之ヲ上梓ス

今般渡航ニ付天秤並秤及ヒ外等ヲ携帯セシ事ヲ乞フ

同廿四日勘定奉行出雲守松平康正カ所呈ノ鯨漁書ヲ忠徳ニ逓與シ其評議ヲナサシム同廿六日注視ノ旨趣ヲ建言ス

鯨漁稼方之儀ニ付相伺候書付　松平出雲守

里見源左衛門陪代支配
越後国蒲原郡村松濱
百姓平野安之丞代兼
同人才

平野廉蔵

右之者儀去酉鯨漁開業之儀願出候ニ付伺之上願之通申渡候處今般小笠原島新規御開拓被仰付近く御役々差遣候旨之趣及承同處ハ鯨魚多く外国人共同島辺ニ而鯨業いたし候趣相聞候間右島へも罷越鯨漁稼いたし度旨願出候間勘弁仕候處右ハ容易難被及御沙汰筋ニ候得共今般右島御開拓之積りニ而水野筑後守殿差遣候儀ニ而近く出帆之由ニも有之候得ハ通而買請所持罷在候船ニ而御用荷物運送又ハ借船等とも為冥加相勤度旨ニも申立是迄漁業法聞届ニも相成候儀ニ付願之趣御差許相成候方可然

も被思召候ハヽ当時水野筑後守江被仰渡候趣仕度奉存
候尤右ニ付右之趣願人江申渡候様可仕哉右之段御勝手方同役江
申談此段奉伺候以上

酉十一月

評議下ケ札

書面之趣一覧勘弁仕候処今般小笠原島開拓被仰
出候ニ付被差遣候ニ有之越後国蒲原郡百姓平野廉蔵
儀同島江も罷越鯨漁稼いたし度且右取かゝり〳〵時用
荷物運送等之も相勤度との趣一躰同島之義ハ鯨猟
相開ケ候ハヽ多分之御益一の御策見込も有之私共罷越候
上実地之形勢ニより尚其辺之模様取調一の申上候様ニ付
在候処全体鯨漁之儀既ニ願済相成居候も乃ニ候間
右様之儀願出候儀幸ひ都合も宜敷ニ付極可然奉
存候間書面之趣其願之通申渡私共江も申談候様
被仰渡可然奉存候右私共当時日合も差迫居候間
右鯨漁稼方時算論相成候上其彼地江罷越候心得方
其勿論一躰之手続等之も申含諸子次第時用荷物
其外運送方致候ハヽ時用弁ニも可相成奉存候間早ニ
被仰渡候様仕度奉存候依之此段評議仕申上候

酉十一月

水野筑後守

同廿六日忠徳等小笠原島渡航ノ千秋丸江戸出帆日
限并ニ帆綱具等ノ儀ニ付建言ス

千秋丸御船小笠原島へ御廻し之儀ニ付
申上候書付

水野筑後守
井上信濃守
木村摂津守
服部帰一

咸臨丸御船小笠原島御開拓等之御用として被差遣候ニ
付別船御仕出し荷船之儀は千秋丸御船へ御軍艦方之
もの為乗組一同被差遣旨被仰渡候処右は蒸氣並石炭を
始食料其外欠乏之品用意之ため兼而運送致し候得共右
等之手数も有之咸臨丸御船之儀は八丈島へ御艤夫ゟ小笠原
島へ御廻りに相成候手續ニ而如何と存候得共千秋丸御船之儀は咸臨
丸御船御出帆日限ゟ相後れ候而も差支無之且停泊場等ハ航海
ニ遠ひ御路筋乗節ニ若航路之場所ニ而帆綱具等充分相届不
申候而は危急之節も有之帆等運轉等差支候儀ニ付此程御
下知相成候綱具類等ハ仕替候様次第ニ而帆ゟ仕立替可
仕候此段申上候以上

酉十一月

同十二月　日去月廿三日ホルトメンヨリ森山多吉
郎ヘ贈リ来リシ書翰ノ回答ヲ忠徳ヨリ贈ル

亜国書記官

ホルトメンロ

貴国第十二月廿四日附ニて森山多吉郎へ被贈候書翰之趣同
人より巨細申聞委曲領承いたし書中被托候無人島ロイト港在
住チテニールセウリロ之書翰慥ニ相達一の申且港入口記する書付
一通並落手いたし格別心入之段深く感し入候右答如此ニ
候謹言

子十二月　　水野筑後守

同月二日去月十九日亜国公使ヨリ贈リ来ル書二冊
ヒ左ノ書ヲ答フ

亜米利加合衆国全権ミニストル

エキセルレンシー

トウンセントハルリス口

小笠原島開拓之義ニ付申入し書翰乃答として被申越
候貴国十二月十九日附第百十六号乃書翰落手書中之趣
領承いたし同島之従来我国属領たる乃証明開墾乃業中
絶としなれハ今其業再興致さんとせし其近居住する
貴国其外諸国乃人民迄も無差別安住いたさすべし且其地乃
形勢ニ依り追々運上並ニ取建其規則なとも定むへけれハ
其ち並ニ為心得被置度此段も并ニ申述候　敬具謹言

文久元年酉十二月二日　久世大和守花押
安藤對馬守花押

同日軍艦方鈴藤勇次郎荒井郁之助石太郎甲賀源吾軍艦繰練処稽古人秋島庸之助軍艦取調役組頭柴田隼太郎同取調下役下山逢吉等へ小笠原島開拓御用別艦千秋丸乗組之旨ヲ下命ス同日用意金携帯ヲ請フトイヘトモ許サス

同日委任状ヲ與フ其文左ノ如シ

伊豆国附島々備向取調且小笠原嶋為開拓差遣候ニ付而者諸事應時宜可及差図服部帰一差遣間可相談もの也

文久元年辛酉十二月

黒印

服部帰一

伊豆国附島々備向取調且小笠原島為開拓水野筑後守一同差遣ニ付而者諸事及相談入念可取計もの也

文久元年辛酉十二月

黒印

同三日忠徳ヲ始其屬吏調役由比太左衛門同並田邊

太一書物方富田達三須藤誠一郎定役元締助小花作
之助定役益田鷹之助同心松浪権之丞等随從ス監察
方ハ常純首領シ其屬吏徒目付佐藤眞三郎松本三之
丞小人目付林和一郎等相從ヒ其他勘定深山宇平太
普請役上村井善平差副テ山川ノ測量及資財ノ出納
ヲ掌リ鉄砲方江川太郎左衛門ガ手附中濱万次郎万次
郎ガ傳巻之六ニ詳ナリハ先年漂流シテ小笠原島ノ内ニ在リシ
ヲ亜米利加ニ扶ケラレ彼国ニ留ル事多年善ク外国
ノ事情ニ慣レ将通辨ニ長シ横文ヲモ知レルニ因リ
忠徳請フテ此行ニ加ヘ又長崎在住ノ荷蘭譯士堀一

郎モ蘭語ノ餘力ニ英語ヲ兼タリトテ通辨ノ為之ヲ
召具シ多勢隔遠ノ羈旅醫ハ救急ノ心要且治療投劑
而已ナラズ幕府ノ医官小野苓庵ハ本草学ニ長シ物
産ニ精密大垣ノ藩医宮本元道ハ画事ニ長シ山水ノ
勝景動物草木ノ寫真ニ精妙ナレバ各其所長ヲ兼務
トシ二名倶ニ随從一行挙テ江府ヲ発シ軍艦繰練所
ニ至リ同所ヨリ一同咸臨艦ニ乗船ス艦中ノ役員小
小野友五郎總轄シテ大小ノ事務ヲ統ベ指揮ヲ加フ
塚本桓輔松岡磐吉豊田港西川倍太郎等針路ヲ按シ
柴弘吉浅羽甲次郎鈴木録之助其運用ヲ知リ杉浦金

次郎喰代和三郎高橋栄司等滊機ヲ運シ近藤熊吉鋭
磯ヲ管シ矢野澤次郎吉一艦ノ用費ヲ轄シ以下水夫
數十名僉航海ニ使役ス其餘全権始諸吏ノ従僕若干
人艦内頗ル雜遝スレドモ法令嚴ナレバ些ノ囂塵事ナ
ク静穏ニシテ品川海ニ碇泊ス翌四日暁天蒸氣ノ炭
烟空ニ立チ度出船ノ機會ニ至リ起錨シテ艦ヲ南方
ニ向ケ発艫ス此日海上波静ニシテ船行恙ナク同日
ノタ尅相模国浦賀ノ港ニ着船投錨シテ今夜ハ此港
ニ繫泊シ五日六日ノ両日滞船専航海中ノ准備ヲ整
フ抑浦賀ノ港ハ江戸海湾ノ咽喉出入ノ迴船輻湊ノ

地ナルニ因リ食料ノ雜品多クハ此港ニテ積入レ用
水ヲ汲蓄ヘ准備全ク整ヒシカバ同七日ノ朝午前九
時同港開船同日黄昏伊豆ノ大島ヲ左ニ請ケ針路ヲ
南方ニ指シ蒸氣ヲ盛ニ焚テ艫行シニ夜ニ入リ逆風
遽ニ起リ漸々風威激烈蒸氣ノカニ船ヲ進メ行ク事
ヲ得ズ加旃潮勢迅烈船長以下水夫ニ至ルマテ機関
ニカヲ盡スト雖モ風濤ノ難ヲ避ルノ術無ク船ハ東
ノ方ニ吹流サレ翌八日モ風止ズ又其夜逆浪ニ漂ヒ
同九日ニ至リ船ノアル所ヲ測量スルニ八丈島ノ沖
東南ノ方ニ十三里程ヲ隔タル大洋也初議船ヲ八大

島ニ寄セ移民ノ旨趣ヲ説諭シ有志ノ男女ヲ引連レ
小笠原島ヘ航ルベシト豫メ決定セシガドモ在斯暴
風激波ニ臨ミ強テ八丈ニ寄セントストモ逆風且潮
先激烈輙ク船ヲ架リ着クベキナラネバ風順ヲ得ル
ノ日ヲ竢ノ他ナシト軍艦方ノ詢咨アリ因テ忠徳當
純ヲ始一同其可否ヲ評論ス蒸氣ノ力風浪ヲ破リ難
ルヒハ見据モ無キ順風ヲ竢烈風激波ノ内ニ漂ヒ数
日ヲ將ルハ最モ危キ事ニシテ初発八丈ヘ船ヲ寄セ
ントト議リシハ海上平穏ノ日ノ定也今在斯困難ノ急
ニ臨ミ琴柱ニ膠スル偏固ノ論ニ機會ヲ失ヒ若シ此

上ノ危殆ニ至ラハ悔テ詮ナキ事ナラズヤ然ル危キ
ニ居ランヨリ一先小笠原島ニ着船シ又為於ノ無カ
ラズヤハト議忽ニ決シ軍艦方共商議ノ上猶南方ヘ
針路ヲ指シ艇行シニ又一層ノ颶吹起リ逆浪艦上ヲ
打越船艦覆没セントス一艦中苦船ザル者モ無ク頗
仆嘔吐各患苦ヲ極ム傳聞南海ハ晩春清明以後地氣
南ヨリ起リ北方ニ至ル然ルヲ以テ麥秋皐月林鐘孟
秋燕去ノ五月ハ南風ヲ常トス晩秋霜降ノ後ニ至リ
地氣漸ク變シ北ヨリ起リテ南方ニ至ル故ニ孟冬黄
鍾季冬孟春如月ノ五月ハ北風ヲ常トス是平穏ノ時

ノ順候也若シ其例ニ反スル至テハ風暴烈ナラザル事ナシ抑大風ノ烈勢ナルヲ颶ト云フ俗呼テハヤテト唱フ書紀神代ノ巻ニ疾風迅風奔波舊事紀ニ速飄共ニハヤテト訓ス和名類聚鈔ニハ暴風ヲハヤチトモ亦ノワキノカゼトモ訓セ今ハヤテト云フハチヲテニ訛リシナルベシ小補韻會ニ颶嶺南録異云嶺嶠夏秋雄風曰颶風千里投荒雜録云南方颶風以其四面俱至蘇文忠颶風賦颶風者具四方之風ナドアリテモ刹貞齊ガ大廣益會玉篇ニハ訓ヲウミカゼト副ヘ備遇切海中大風ト見エタレバ其風ノ烈シキヲ云フ名

ナルハ論ナシ颶ニ勝リテ尚甚シク激シキヲ颱ト云フ俗ニアカシマト称フ玉篇ニハ訓ナミタツルト假字ヲ加ヘ職剣切風吹風動也トアリテ共ニ海上ノ暴風也然ルニ颶ハ常ニ遽ニ起リ颱ハ漸アリテ起レリ尤颶ハ瞬間ニ發リ立地ニ止ミ颱ハ吹起ルヨリ一昼夜或ハ二三夜白乃至數十日モ止ザル事アリ春夏颶多ク晩夏ヨリ秋ニ至リ颱多ケレバ航海ノ諸船此變ヲ懼レ專注意シテ雲ノ為躰ヲ考ヘ雲若シ半天ニ起レバ帆ヲ下ケ舵ヲ深ク差卸シ船脚ヲ強クシテ不虞ノ豫備ヲ為スハ船人ノ常ニ覚悟スル所也然ルハ用意モ

ナク颶ニ遇フハ脱ルヽ幸ナキニアラ子ド若シ颱ニ
遇フニ至テハ風勢激烈脱ルヽニ術ナク多ク此為ニ
傾覆ス然ラスダニ風暴ク濤立高キハ冬海ノ常例ナ
ルニ在斯洋中第一ノ難風ニ遇ヒ数日ノ漂蕩精氣衰
ヘ最心細キ央尚一天結陰黒雲船ヲ覆フ欤ト覚エ暴
雨一入篠ヲ衝凌競キ事言語ニ盡スベカラス十一十
二十三ノ三夜白ハ颱風激波ヲ起シ暴雨貧ヲ傾ク此
為驚濤空ニ起テバ船半天ニ上ルカト疑ハレ濤底ニ
連レテ船ニ沉没スルカト覚エ吐嗟一艦ノ甲乙鯨鯢
ノ腭ニ屠ラルベシト驚愕事夥四ナルヲ知ラズ斯テ

ハ生モ得難カラント船将始軍艦ノ士官遑遑足ヲ踏
止メ水夫ニ指揮シテ機械ヲ操リカヲ盡シテ甲板上
ヲ打起ス逆波ヲ凌キ漏入ル淦ヲ汲乾サセ曾波上ニ
浮ミ風ニ流サレ十四十五ノ両日ニ至リテハ小笠原
島ヨリ遥東南ニ漂ヒ十六日尚前日ノ如シ十七日ノ
午後ニ至テ颱止ミ雨霽レ激波稍静リ入々初テ再生
ノ心地ス軍艦方測量シテ栗艦ノ今在ル所ヲ験視ス
ルニ二十三度十七分ノ東南也兎角スル程ニ南風吹
起リ針路ヲ直シ船ヲ小笠原島ニ向十八日夜白十九
日着船父島ナル奥村ノ前湾ニ入祝砲ヲ発シ投錨各

安堵ノ思ヒヲ為セリ此時地方ヨリ一隻ノ扁ヲ漕キ
本艦ニ向テ来ル者アリ是水先業内トシテ在島ノ英
国人ニ名カナカ（南島人種ノ名）人一名乗組テ来リシ也頓テ
本艦ニ扁舟ヲ着ケ事ノ旨ヲ報グ承次ノ者全権副佐
ニ披露ス忠徳常純其趣ヲ聞幸ノ便宜ヲコソ得タレ
ト先外国方ヨリハ太左衛門ヲ指シ監察方ヨリハ三
之丞ヲ指尚善平ヲモ呼三士ヲシテ江戸発途ノ以前
ホルトメンガ所托ノ書翰ヲ齎シ之ヲ遺与シ尋テ今
般ノ巡視ノ旨趣崖略ヲ説示スヘシト命シ万次郎ヲ
通辯トシテ随従ナサシメ水先ノ在島人ヲ嚮導ト為
シセイボレガ家ニ至ラシム是同人ハ酋首ノ如ク在
島人ノ処分ヲ管ルヲ以テ疾ク彼ヲ説クヲ肝要トス
レバ也三士セイボレカ居宅ニ至リホルトメンガ書
翰ヲ達シ今般台命ヲ奉シ巡視開拓ノ旨趣ヲ懇々ト
説示シ且彼ガ来島ノ事實ヲ尋問スセイホレ先説示
ヲ謹承シ次ニ其身ハ千七百九十四年第七月廿一日
亜米利加合衆国ブラツキフキタ（地名）ニ於テ出生今年
已ニ六十歳今ヲ距ル事卅二年以前千八百卅年第五
月五日三己島ニテ轉移ノ准備ヲ調ヘ便船ニ乗リ同
年七月十六日父島ヘ到着洲崎村ニ卜居後奥村ニ轉

住在留ス其始国命ヲ総轉移セシニハ非ズ高賈ヲ以家業トスルニ不利ノ事アリテ居ヲ他国ニハ移セシ也現今父島在留ノ人員十六名家数十九軒其ヲ英国人ジョージホーツトーマスエツチウエブト云ヘル者等ト大小ノ事件ヲ云ハズ百端相共ニ商議シ焉中ノ處分ヲ沙汰シ来ルト雖モ固ヨリ首領ナケレバ定マレル法令モ無ク在住スル者ハ根原烏合之馭スルノ權無ク處置ニ苦衷スル事尠カラズト既往ノ郷談伏薪呑炭ノ事情ニ至ルマデ懇ニ説示スヲ三士一切聞畢テ其意ヲ得別ヲ告テ本艦ニ帰リ應接ノ顛末島中今目撃スル分野ヲ詳悉ニ命ス忠徳常純此後命ニ太約異論無カルベキヲ察シ然ラハ明日上陸シ全島統馭ノ端緒ヲ發ベシト商議テ此決シ三士及通譯ヲ慰労シテ各寢房ニ入リ過刻マデノ困苦ヲ忘レ轍魚江ニ放サレ枯苗雨ニ遭フノ心地ニテ今霄ハ寢ヲ安クスル事ヲ得タリ翌レバ同廿日黎明ヨリ上陸ノ准備ヲ為シ忠徳常純ヲ始両寮ノ屬吏及勘定方以下随行ノ諸吏通譯等一同上陸倩島山焉躰ヲ眺ルニ嶮峻タル尖峰遠近相連リ立チ深谷地ヲ帯リテ崖岸ノ形ハ鑿以テ穿チタル如ク高嶺ハ天ニ横ハリテ崗巒

ノ勢宛然刀ヲシテ削ルカト疑ハレ海面ニ峙リ立テル島々遠キハ眉ノ如ク近キハ盆石ニ似タリ西ノ方ニハ一條ノ河水滾々ト流レ大村ニ接ス東ノ方ハ堺浦ニ續キ洌寄村ニ隣ル海濱ハ白砂鷺毛ヲ布クニ似テ非時ニ降ル雪カト怪タレ海底深ケレハ風アリテモ波最平ニシテ繋船ニ便利也村落ハ湊ノ奥ニ茅屋疎ニ立飯烟空ニ騰騰村林家ヲ圍ミ後ニ高山アリ是所謂旭山ニテ秀峯天ニ接シ白雲山ノ腰ヲ帯リ画クガ如シ折シモ三冬末ナガラ土地暖温ニシテ草木全ク枯レズ實ニ遊仙ノ地トモ可謂勝景向フ所毎ニ奇シク珍シカラザルナシ先便宜ノ所ヲ借リ受ケ假ニ此所ヲ官廳ト定メ三町白ク幕ヲ張リ番卒ヲ置キ設全備シテ各同所ニ出張ス子サ子ルセイボレシヨージヨージホーツン等ヲ徴出面晤ス對話筆記左ノ如シ

一應挨拶畢テ

始而面會致し候其方とも永年無事ニ而相暮し居候段大慶存候

難有奉存候

當島ニハ何拾ヶ年程居住致居候哉

三拾ヶ年程居當仕候

此度拙者共派遣候儀ハ當島開拓之為ニ有之候ニ付其方共
退去為致候儀ニ者無之候間安堵可致候
左候ヘハ私共一同安心仕候
右者追而内地ゟ農民共移候而来永ク和合致し相暮
候様致し度候
夫ハ素ゟ私共相願候儀ニ御座候英船渡来致し候後英
国所領之様ニ相成右證書数通ニ存し居候儀ニ有之右ニ付
承知ニ存度候
無論相心得居候此方ニテハ三百年前此島を見出し国人共渡
来致し神祠取建候儀ニ有之右ハ其方共相心得居候此

私共ハ只英領と而已相心得居候右様之儀ハ始テ承り申上
候儀ニ者候得者私共渡来致し候節ハ全く無人島ニ有
之候
此方ニテハ三百年前建物等致し小笠原島ト名付弐百年程
打続候ヘ共百年以前中絶致し候ニ付其方共渡来之砌（朱）不知ハ空テ
無人島可有之候ニテ其方共多年住居致し候上ハ其儘差
置候様可致候
私共一向心得不申儀ニ付彼是申上候儀ハ無之候得共日本国ニテ
候見出来候と之證記録ニテ經見仕候
其方共開墾之土地ハ其儘差置以来開墾致し候地所ハ有

之候ハゝ此方同列之上差図ニ任セ一同申含厚ク心得可置事ニ
候

旅宿仕候以来日本之掟ニ随ひ候儀ニ候哉

右之此方農民引移し追テ相定可申候

當島之規則書も此度写入御覧可申候

夫々先達移住致し居候其方限之申合ニ付此方ニテ相用候儀ニ
有之候へ共見合ニも可相成候間一見致し置可申返可差出
し可申候

承知仕候

此品々ハ政府并拙者共より差出候間遍く其方々配分可致候

此時下知シテ目録ヲ追與シ携帯ノ諸品ヲ授ク其目録

一 酒　壹樽

一 蠟燭　三拾挺

一 吸物椀　五十人前

右政府より島民へ被下之

一 錦繪　百枚

一 扇子　百本

一 金物類　拾七通

右筑後守より島民へ遣之

一 手拭　二拾筋

一手遊もの　十六

右帰一ゟり島民へ遣之

一三ツ組楮口　一箱宛

右筑後守ゟりセイボレウエブボートン三人へ遣之

一提煙草入きせる共　一通宛

右帰一ゟり前同断三人へ遣之

金物ハ鉄小刀剃刀ノ類ナリ

各受納メ

難有頂戴仕候

家鴨當島ニ無之由ニ付二番セーボレへ遣し候間追々飼立蕃殖

様可致候

此雄二番ヲセーボレへ遣与ス受納メ

難有奉存候

以来当方若病之儀有之候ハヽ可申立且此方ニ医師も召連候

間病人有之候ハヽ可申出候

只今差当り病人も無之候得共有之候節ハ相頼ミ可申候

当地ハ地震有之哉と尋ニ付

大地震ハ無之候へ共少し宛之儀ハ一ヶ年両三度位有之候

津波ハ如何哉

當年ゟ七ヶ年已前大津波有之其砌ハ私所有之家不残押

流し剰へ家具什器等も流失致し候

右ハホルトメン渡来後之事ニ候哉

右様ニ御座候

其節支人ニハ怪我無之哉

人類ハ無事ニ有之候

夫ハ何月頃乃事ニ候哉

十二月廿九日乃事ニ候

此方ゟ東南乃方ニ当り我国母島と唱候島ヘ支往返致し候哉

屡往返仕候

右島ハ人家何軒程有之候哉

四軒有之候

居民ハ何国之人種ニ候哉

一人ハ英人一人ハ葡人ニテ亜国ニ永く滞住仕候もの二御座候其余ニカナカ人ニ有之候

何船ニテ往返致し候哉

彼小船ニテ渡航仕候 実名ケス一舟

夫ハ至テ危き事ニ存候

当日和見合セ航海致し四時ニテ着島いたし風様ニ寄り候而ハ六時程も掛り申候

豚鶏ハ如何哉

此島より一倍も多分ニ有之候

此島西北之方附属之二島ハ住人有之哉

無御座候

此二島ニハ鹿羊多分有之哉

右島ヘハ折〻參り候哉

魚類ハ多分居候得ハ魚漁乃為メ相越申候若御船ニ而魚多分

御入用之節ハ右島ヘ漁シ差上ケ可申候

木材ハ如何ニ候哉

右ハ此島同様ニ而奥山ニハ一切大木も有之候

此度野菜種物多分持越候得ハ差遣可申間植付方承知候

様可致候

當島ニ而ハ種物等ハ欲要存居候ヘハ何分難有候ハ知御持

越被下候段難有奉存候且兎角藥数種物乏れ兼困

惑仕候

右ニテ畢

應接些モ異論ナク彼ガ兼肯ノ遜ナルハ案外也ト先

発端ノ吉祥ヲ祝シ片時モ早ク御国旗ヲ颺ゲ皇威

ヲ光耀（カヤカス）ヲ急務也トシ建置ノ地ヲ撰ブニ奥村ノ後山

ハ全島第一ノ峻嶺此拯巍然ルベシト決議シ本日直

ニ登山ヲ企テ土人ヲ嚮導トシテ山ノ麓ニ至リ遂ニ

山上ヲ仰瞻（アフギミ）ルニ羊膓タル細道嶮嶇峯ニ續ケルハ是島

民等ガ樵路ナルベク列立ル大小ノ嶺ハ参差画ニ異ナラズ稠密ナル深林ハ常葉枝ヲ雜ヘ澗溪ノ絶壁嵯峨トシテ寒草風ニ乱レ路傍荊棘生暢テ人ノ歩行ヲ妨ク登ルニ循ヒ徑路嶮岨枯草ヲ結棄タルハ是何人ノ栞ゾ累レル巖ニ纒フ藤ニ縋リテ漸ク山巓ニ至レバ秃山天ニ聳白雲眼下ニ靄キ四方ノ群山僉低クシテ眺望ヲ支ユルモノ無ク海湾島嶼ヲ一目ニス人々此地屈竟也トテ直チニ郵偈ヲ樹テ日ノ丸ノ御旗ヲ掲ク因テ後ニ旭山トハ號ケシ也日已ニ斜照人々遠望ニ心ヲ奪ハレ不図時刻ヲ迁セシニ驚キ下山ヲ促シ帰路ニ臨メハ樹下ハ道ヲ埋ム落葉ニ乗リテ濘リ湿滋ノ地ハ道滑ラカニシテ歩行ニ自在ナラズ労スルコト却テ登リニ倍セリ兎角シテ難路ヲ下リ黄昏假官廳ニ帰リ着ス島民ノ居室内地邊陬ノ民屋ト異リラワロー一名タコノ木ト号ルモノヲ柱桁トナシ野芭蕉ノ葉ヲ以テ屋上ヲ葺ケリ總テ見ルモノ聞クコト耳目ニアタラシキ心地ニテ土風八丈青島等ニ太ク異リ事容心ヲ増終夜帰夢ヲ不結ハナシ同廿二日各洲嵜村ニ至リウヱブト對話ス

一應挨拶畢テ

其方當島ニ来リ何ヶ年ニ候哉

英国千八百四十七年亜国船チヤリパントト申鯨漁船ニテ當
島ヘ参リ病氣ニ付懇請致シ相残リ申候

當村人家何軒ニテ人員何人程ニ候

家ハ三軒ニテ内一軒ハ補理ニ有之家内之外ハ英人壱人トー
マシレシメスト申者同居罷在右者去七月當島ヘ来リ申候

同人儀者英国軍艦之水夫ニ有之候処蘭之鯨漁船ワイ
ルト申船ニ乗組罷越先又病氣ニ付止島仕候

夫ハ船主其外ヘ申立之上居住致シ候哉

私儀者船主チヨーレレツレルロウ井ントト申者ヘ申立暇を乞止宿仕
候トマシも同様船主承知之上ニ而止リ申候

此島之畑者其方開墾之上所有ニ致シ候哉

此迄ハ英国リチヤタメリングトト申者之畑ニ候処同人儀者當時テ
トチレ島ニ罷越住居仕候由ニ候

其方並トマシ両人共當島ニ永久住居致シ度候哉又者本国便船
有之候者帰國致シ度候哉

私儀者終生當島ヘ住居仕度存罷居候トマシ儀者素ヨリ永住
之存念不申病氣快復之上ハ法國地ヘ参リ右便船次第罷
越度存罷居候同人職業ハ工匠ニ有之候

工匠ニ候ハ當島ニ而取建候節右手傳候様ニ致候

第一此用弁ホとも相叶候ハヽ難有奉存候

今般日本政府並拙者ヨリ右島民一統ヘ差遣候示シ之趣ニ首尾

セーボレヘ相渡置候ニ付従学及候哉

一ヶ月程ニ前分セーボレヘ文面写不仕候得者右本之儀未タ来

リ不申候ヘ共何之通ニ候テ難有仕合奉感謝候

此老婦ハ雑〔誰〕之書ニ候哉

英人ロフレンと申者之書ニ候右同人ハ当島ヘ在職致候積ニテ出

帆之後留島不仕候

此少婦ハ如何なる者ニ候哉

是ハ右老婦之娘ニ而外ニ者も無之候右ロフレン帰島不仕候ニ付右

娘ハ私書ニ仕居候

右ニテ畢ル

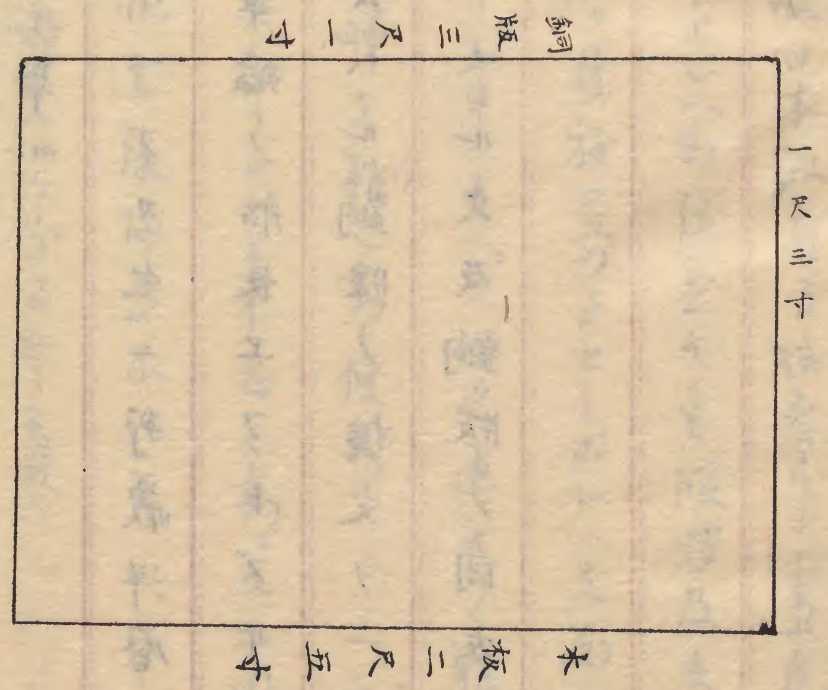
本日ウヘブカ宅ニ所蔵洋暦千八百二十七年 皇国文政十年

英国軍艦ノ船長エフトブリユーピーチーカ遺シ置

シト云ヘル銅版ノ横文ヲ一見シ通譯ニ指揮シ翻譯

サセシメル文及銅版ノ図左ノ如シ

撲文和解




諳厄利太尼亞王殿下の船フロスツム号舩船長エフトフリユーヒーチー名人千八百二十七年第六月十四日諳厄利太尼亞王殿下第四代のチヨーチ名人ヲ代りて此諸島を領せり

同廿三日奥村ニ於テセーホレシヨーシウエフへ再對話

一　應挨拶畢

此程借家之儀申談候處此方所望之通り届都合宜敷且船買上方相調至極便利ニ付候

二艘之買上ニ付難有奉存候

猶賣拂候品有之候哉

只今者無之候へ共追々出來可申候

差向入用無之候得共出來次第持越候様ニ付買上可申候

修復一艘二三日中ニ出來候得者入用ニ候ハヽ差上可申候

新調之方買上度候

新調之方ハ當島へ行通致し且亀を捕候ニ入用ニ御座候得

何分難差上候

如何いたし候而亀を捕候哉

浮出し候節鍵ニ而引懸ケ捕申候

何所ニ多ク集リ候哉

島民総人数何程ニ候哉

三十九人ニ御座候尤當三日前出生致し候者も有之候

セーボレ配下共拾人内男壹人女三人男児壹人女子三人チヨ

ージ配下者拾壱人内男四人女三人男子三人女子一人ウエブ配下

共七人内男壹人女壹人男子両人女子一人カレシ夫婦而已ブラボ

ー家内五人内男三人女壹人ペパレ男壹人而已外英人壹人カナ

カ人壹人合ハ當島ニ永住仕候者ニ無御座候

姓名ハ何と申候哉

英人ハトースミレメズカナカ人ハチヤレと相呼申候

ホイボレハ小児何人有之候哉

四人有之其余ハ配下之者乃小児ニ有之候

ウエブハ何人有之候哉

壱人有之候

男ニ候哉女ニ候哉

未ダ懐胎中ニテ相分り兼候

右三日以前出産致し候者ハ何者之子ニ候哉

ケレヲ申者乃子ニ御座候

当島ニ而既立候者幾人有之候哉

セーボレジヨーン ウエブ之三人ニ有之候

被下候酒ハ其方ニ而も渡し配分致し滞留中之者共ニも

右方ハ港内ニ而ハ其一亀ヲ捕候ヘハ外亀逃出申候間定而塲

所ニ而ハ無之候右西洋四月頃ニ大陸ヘ上り卵を生じ候間右分

相捕申候

四季共捕レ候哉

当月ヨリ西洋八月迄ニ相捕申候

食を与ヘ飼置候哉

殺し候而牛豚之如く塩漬ニ致し又ハ水有之塲所ヘ生かし

置申候肉ハ牛豚之如く厚味ニ有之油も随分用ひニ相成申候

燈油ニ相用ひ候哉

搯列煙も相立不申臭気も無之頗透明ニ御座候

右油鯨漁船等相雑候節賣捌候哉

然と致し候ヘハ賣渡候ヘ共多分自家之用ニ供し候儀

ニ御座候

一トラルニ何程ニ候哉

西洋量三斗ニテ三トラルニ有之候

此程政府ヨリ被下候品並拙者ヨリ差出し候物配分之節ハ

支配向之立會之儀ハ取扱候輙いまた割付不致候哉

御請取申上候後ニ御座候

速ニ配分可致候

唯今配分之仕分書御見分可被下候

相与ヘ可申候

承知仕候

此時別段物ヲ與フセーボレ並配下ノ者等ヘ椀十人
前別ニセーボレヘ三人前ジョージ並配下ノ者ヘ十
一人前別ニジョージヘ三人前ウエブ並配下之者ヘ
七人前別ニ三人前ウエブヘフラボー並配下ノ者ヘ
五人前別ニフラボーヘ二人前カレニ二人前ペパレ
ヘモ同様其他蠟燭十挺三人ノ重立ル者等ヘ以上ハ
僉政府ノ賜也重立ル者ヘ扇子一本宛別段セーボレ
ヘ扇子一本錦繪二枚宛重立ル者等三人ヘラボーカ

レンペバレヘ錦繪ニ枚宛外ニ猪口一筥宛童立ル者等ヘ以上忠徳ヨリ授与ス小刀類一本宛別ニセーボレヘ一本午巾四條笄五本宛童立ル者等三人ヘフラボーカレンペパンヘ二宛首飾（カザリ）セーボレジヨージウエブヘ各四宛フラホーカレンペバカヘ各二宛並翫具以上常純ヨリ授与ス各受納メ

種々被下物難有頂戴仕候

セーボレハ子共多くも有之儀ニ付當島ヘ永住致度本志ニ候哉而ハ使船ホ有之候ハヽ帰国致度心願ニ候哉

終生當島ヘ住居致度最（モツトモ）欲望する所ニ御座候

ジヨージハ單身之儀ニも有之候哉妻如何ニ候哉

獨身ニ御座候ヘ共同居致し居候者ハ英人ニ而至極深切ニ世話致し呉候者セーボレ同樣永住仕度旨只今迄無妻ニ候ヘ共不遠妻貰請候節其節ハ分居可仕候心得ニ御座候

英人ハ姓名何と申候哉

ウリレムゲレと相唱申候同人父英人ニ有之其者ハ當島ニ而出生仕候

同人父ハ何と申候哉

矢張りウクレムゲレと相唱申候

ウエブも同樣永住相願候哉

憲々永く住居仕度懇願ニ御座候
此趣もセーボレへ申談せしめ候く右様之心底ニ候ハヽ永く為住
セし先旦是迄切開し土地ハ当年貢ニテ作附差許其余開
墾すべき場所ハ自段ニ切開候事ハ難相成就ては切開度場所有
之候ハヽ此方役人乃差図を受然る後取り掛り可申候
承知仕候
時日を断し其方共切開候場所一廻り見分致し置候ハヽ其為ゟ
急支配向差遣し見分一の分致候得者夫々標木立置ハ掛可致
且切開之場所悉くセーボレ之地所を申候も有之候得者其銘
し所相致し居候姓名記し置この申候

当御内セーボレ住居之場所セーボレ一人ニ而切開候哉又ハ他人も加
り切開候哉
左くセーボレ切記申候尤カナカ人一人有之候へ共相雇る切起
候事ニ御座候
ジョージ之住居致し候本相之方ハ如何候哉
相共ウリームゲレ土人ニ而相掛致し居候
其他之者ハ如何候哉
ウリゲレ之父新開相始夫々引続同人其跡を継当島ニテ
ハ私ども共ニ取掛仕其他ニ而相仕者ハ無之候
ウエブ之相方ハ如何ニ候哉

當時キユアームト申島ニ住居致シ候ウリヨムメルチヤンブト申
者切聞申候
最初同人當嶋ヘ罷越候節私共義加入仕唯今ニ而ハ右場所
私共引請差配致シ居候
材木之儀ハ山々ゟ伐出候得共何レニも一ト通之有之候へ共只今ニ而ハ之切聞候
細地ヘ植付候分ハ格別其他之材木ハ此方ニ而入用候得ハ申立
候半ハ伐木難相成薪ハ手次第ニ候
家作之用ハ丈ケ取申度候
右銘々住家之用辨丈ハ爲伐一ト申候其節ニ申立差図ヲ受
候上取計度く候

承知仕候其節ハ一ト通申立候
山も不持致シ居候
山々ハ自然之草木有之右を勝手ニ伐取我物と取極候事ハ
難相成候
村方前面之木ハ私共植付候もの之由申候
銘々植付候分ハ勝手ニ伐取不苦候へ共其余ハ難相成候得共左
様相心得一ト通申候
承知仕候
山々栖居候獣類ハ恣ニ猟取候事難相成候
私共相放シ候島獣ハ不苦事と奉存候

何を放し候哉

小ヶ島へ羊緜羊唐ハツク嶌へハ豚羊此島へハ牛豚羊を

放置申候

左様ニ候ハヽ自分家族ニ生育候分ハ勝手ニ可有之候へ共此方ニ而

も先年右等獣類を放候儀も有之且其方ゟ仮令を放候迚生

育致候ニ付何等之物を食し生育候哉則此嶌天然生之草木

を食し生育致し候事ニ而則日本草木を食し生育いたし候之儀

其辺如何御心得候哉

日本ゟ御放候儀も可有之候へ共私共宮(?)初度越候節ニ更ニ

獣類ハ見受不申然ル処御放し候ゟ生育致し候様承候

左様ニも可有之候へ共草木ニ於て候而も生育難致此島ハ日本

ニ而三百年前見出し属島ニ致し候事ニ有之候

素ゟ草木有之候而も獣類御放不申候

日本属島ニ生し候草木を食ひ生育致し候獣類自然ニ猟

取候事ハ難相成候

左様ニ而も私所持致し候者を除取上ケニ相成候も同様ニ候

初メ此島へ放し候迚其方ニ而勝手ニ猟候而ハ至(?)人之家ニ食客

致し居候勝手ニ其ハ思ニ預り居候而此家ハ我家ニ有之候旨申聞

候と同様ニ候其方放し候迚勝手ニ猟取候ハヽ此方ニ而も此方之草

木ニ而生育致し候故勝手ニ猟取一ノ申立候ニ付暫時ニ種を失ひ

相成候詮更ニ無之旨存候
自分ヨリ食料丈猟取候事而責置候得共無之右之食
料ニ而之候而者日々之生活差支申候
食料ニ致シ丈ハ一ヶ差許候
右之獣数を猟取シ当港ヘ入来候鯨漁船等ヘ売渡候事ハ
更ニ無之他之鯨漁船等ヘ差越候節ニ窓ニ上陸遊猟致シ候
ニ付其種を欠ひ候半歟と深く心配致シ居候程之事ニ付
望候
此方ニ於ても種を絶候儀深憂ひ候ニ付食料ニ致シ候分猟取
候事無之指申候事ニテ以後他国之船ニても濫猟不為致

旨可取計候
是迄獣数猟取候儀易取ニ致シ候事更ニ無之只々当島之
食料ニ而已相償ひ申候
日本ゟ再ひ当島開墾ニ付而渡越相成候半とハ更ニ不存寄儀
ニ候得共獣数右指蕃殖いたし右候者日本之渡来之上者相成
候儀ニ致存候
右之趣其方支配下之人民ヘ委細ニ可申聞候
委細承知候得共不濫猟可申通候
若他国之鯨漁船等渡来猟取候事有之候節ハ早速此方
之役人ヘ告知可致候

速ニ御告ケ可申候
防ニセーボルトハ先年賊災ニ罹リ跡相成候
左様ニ御座候而千八百四十九年ニ織災ニ所持之品物悉く
奪去候其数凡四千トルラル程ニ有之候
右之跡も聞及候得共此後支那方ニ而如何様共いたし右様之
害無之様取計可遣候得共若此島へ参候も乃悪事致し候ハヽ
速ニ可申出候
右様御取計被下候ハヽ誠ニ可難有事ニ而右様之儀ハ日本役
人之助力ニ拠リ可申此島ハ役人被差置法則相立置御取計候
事素ゟ然願之至ニ御座候

法則取調候而治定之次第差示し可申其後万事扶助致し右
穏ニ土着せしむへく而其辺之恥無之様可致候
法則法取極御座候而違犯仕候者見之上申上候儀も
可有之候
申立候ニ付有之候ハヽ一ニ應兼リ候上其次第ニ寄勘弁ヲ加へ候儀
も可有之候
然共礼防御勧不申候ハ支日本政府ゟ不意相成取調置之候
事ニ奉存候
素ゟ乃事ニ候
右乃跡此ニ庫ヘ居合候も乃ハ兼而ゟも一乃ヵ之候ヘハ其余ブラボー

カレンホヘ候銘ニより告知セし申候
義出仕候
仮令其身死し候後其子幼弱ニ候共日本政府ニテ世話致し
跡目相續為致候間其辺ハ心易く一の存居候
私も同様心配罷在候如何分當島ニ而右様之事ニ及之平生
憂悶致し居候処日本政府ニ而厚く御世話被成下候様願
知仕何より難有奉存候於私實ニ死後之所置安堵先
ニ通候事無御座候
ジョージハ妻子も無之候へ共死後ニ至り候而も厚く扶助を差
加へ申候

雖有難存候畢竟ニ候へ共死後之事ハ宜くウリレムゲレニ相
賴置候
追々内地より人民相移し医師其外ニ至迄も當島ニ而相
成し候様一同承知申候
誠ニ御厚情之段難有奉謝候既ニセーボレハ小児三人相残ひ申
候
セーボレ其外之者共病氣ニ而當島へ相残候事ニ而我国政府之
命を受居候儀ニ候ニ付其之義を被存候
セーボレハ亜国コモトールペルリ之国旗相預り不相居候
其ハ事も承知居候最初當島へ罷越候ハ漂着致し候哉

又々此辺ヘ居越見出し候而碇泊候哉

最初三乙島ヘ仕出申候其私ハ英国コンシユル亜国商人一同之

組合ニ御座候

當島を目差し向候哉

左様ニ御座候

英コンシコル所ハ姓名何と申候哉

チヤルタンと申候

亜商人何と申候哉

トムレンと相唱申候

其外何人ニテ居越候哉

総計弐拾弐人ニ御座候

其ノ三乙島人ニ候哉

仰之通りニ候

セーボレハ同島ニ住居致し候哉

三乙島ヘ交易仕出し島々行通ひ致し居候

フラボーレハ何所ヘ移住候哉

千八百三拾二年より移住仕候

英人ニ候哉

葡萄牙人ニ御座候

カレンハ何國之人ニテ何所より移住候哉

英人ニ而ブラボート一同罷越候

ペバンハ如何候哉

千八百四十五年カナカテハイテ島ゟ罷越十七年相成申候

前条申聞候件〻下〻ニ至迄ニ而違無之様可申達候

承知仕候

私共義ハ一旦ニ有之候間而取建ホ置之候ハ而伐役ら下候右

代リ而國を而達越共下候ハ右之振而國立留之英国使

コンシエル之内へ申立而世話ニ而罷申置候而年屈ら下候

奉頼候

何是ゟ當港出帆之所調兼可及挨拶只今即答難相成候

雖有奉存候當七月英船乗組當島へ残候へ共全く之

念甚敷一日も早く帰國仕度候

大工を職と致居候試方ゟ幸用事も有之候間可相叶候

木を挽割候職ニ有之食事丈ハ被下候ハヽ十分相働可申候

自身ニ而差働人之世話ニ不相成様相仕度存候

右之辺相察し候間可相使と申哉候ハヽ何を食料ニ致候哉

国地之品相好候へ共日本人ニ被在候儀ニ候ヘハ清國之食

物〻載仕候

米を食し候哉

相用申候

羊類ニ用候儀ニ候ハヽ此方ニテ其用意可致候
代料ニ不及候ハヽ島民々自分ニ好候物買受可申候
是ハ容易之事ニテ此方之手数も相省申候
葱種（セーボルレ云）を取栽仕度趣付相伺可申候
穿鑿致し可差越候
米をも取栽仕度候
何程入用ニ候哉
三斗程取栽仕度候食用ニ仕候價ハ何程ニ候哉
差出ニ不及候
ジョージも同様相願度候

可差越候
明日取栽相成可申哉
明日午後役所へ罷出可申上候
右ニテ畢
同廿七日奥村ニ於テ忠徳常純ヲ始属吏列席セーボ
レト對話ス
一應挨拶畢テ
其方ハ合衆国民之由承り及ひ候何ものゝ部内出生ニ而何地
より当地へ移住致候哉
吾碩士部内ブラウブアータ出産ニテ三乙嶋々英コンシユルチヤ

ルタニ亜商人トムレン同船ニテ仲間申合凡二十二人当島へ移
住仕候内九人ハ欧羅巴人種ニ有之右其後三年程ニ乙島
へ引返ひ支度仕候へ共尓後申絶仕候
右弐人ハ当時迄同致し罷在候
内壱人ハリチヤルドフランチヤンと申者滝左手村方切害候処
其後当時同所ニ罷在候ウエブ儀来致し其仲間ニ入本
人ハ十年以前亜米利加鯨漁船イヽヘルベセチ子ヨ乗組立去
ギユアム島へ移住仕候壱人ハ嗹国乃者チヤルスヂヨンレン十二
年前英鯨漁船ニ乗組本島ゟ立去壱人ハ意太利亜人
コリンセラノ子八百四十五年死去壱人ハ亜人カールデンビーチヤ
ピン五十一年本島ニ而死去仕候外カナカ人種十七人内マクイ
シヤン島男女二人男乃方太郎当時ジヱークマクイジヤンふく
女之方ハ病死仕候三乙島人十五人男六人女八人何も鯨
漁船ニ而追々島出仕当時者ハンヤトヽ申者当時住居仕一人
ハキユアムへ罷越其地ニテ病死仕候
此村方ハ其方悉く切害致候
船一人ニ而切害申候
当年幾歳ニ罷成候哉
六十六歳ニ罷成申候
妻ハ何と申幾歳ニ相成候哉

名ハメリヤ年ハ卅二歳ニ御座候

何地乃出生ニ候哉

是班牙領ラトロ子ン島内キアム島之出生ニテ千八百四十四年
六月渡来致し一躰私同様ニ而初當島へ移越セラ之妻
とも来候処千八百四十六年右夫病死仕尓後私妻ニ相成
申候

右妻渡来之節ハ何国之船ニ而相越候哉

英鯨漁船アレフランシセス又乗組アルチルチヤンブと申もの夫婦
同船ニ而相越住居仕候

子供ハ何人育之候哉

女子二人男子弐人男一女ハアキ子シレホアバンセーボレ九才男二男
ホレスヘレセーボレ七才男三女エレンセインセーボレ五才四男ロハ
タセーボレ二才ニ相成申候

マクイシヤンハ妻子育之候哉

妻名ハホーレンと申ウエレントル島出生ニテ女子一人育之メ
レキタと唱申候

各国漁鯨船本島へ渡来候事大凡一ヶ年幾艘位ニ候哉

初年ハ凡三四十艘も入津仕候事も有之候へ共四五年来
ハ三五艘来泊仕候位ニ御座候千八百二十七年ニハ英国
甲必丹渡来致し十八年前英国軍艦渡来軍卒之内

十四人當島へ御迎住居致し候も乃有之又十二年前ゟも二檣軍艦渡来前後弘化渡来已後三度来泊仕候

其方最初御越之節ハ本島ニ前住移民ハ無之哉

全無人島ニテ私共草創仕候事ニ御座候

右ニテ畢ル

同二十八日忠徳常紀以下屬吏列席大村ニ於テセーボレジヨージヘ對話ス其崖畧

一應挨拶畢

セーボレハ病氣之趣如何ニ候哉

昨夜ゟ俄ニ足痛甚敷殆當惑仕候

歩行ホ不都合ニ可有之候

今般之容躰痛楚御覺候へ共歩行致候ハゝ左程差支無御座候

奥村假小屋ニ醫師罷在候間得と療治受可申候

今般療治受候間更在少く快方ニ御座候

奥村へ此日罷越候節一ト通申談知セーボレ而已ニ而其余之者不居合候ニ付今日呼集候上申談候事ニ而此方貨幣ニ而買受候ニ付右見本御渡遣候間左様可相心得候

承知仕候

右貨幣大小數多有之候間巨細書付ニ致しトルテル匹敵

之價記置候間一覧之上會得可致右日本ニテ外国拂合
品物等買請候節不都合ニ可有之候間右之節ハ此方ニ而ドルラ
ルヲ引替可遣候
家居ヲ構居候もの江者銘々ニ相渡可申三ヶ村ニて幾軒有之
候哉
八軒ニ有之候
其書左ノ如シ
一 二歩金壹枚 壹ドルラル
一 二朱金四枚 同
一 壹歩銀二枚 同
一 壹朱銀八枚 同
一 百文銭三十枚 同
一 鉄銭三千枚 同
件ノ書ニ皇国貨幣ニ歩金一方二朱金四方一分銀
二方一朱銀八方天保百銭三十枚鉄銭三千枚ヲ器ニ
ニ安排シ書記ス所ノ目録ニ夫々照準シ授ケ与フ抑
金二分ヲ以テ洋銭一枚ノ價ト定メシ所以ハ洋銀一、
銭ノ時價（サウバ）現今各開港場ニ於テ一元大約（ヨソ）三十五六匁
ノ融通ナルヲ以テ其比較ヲ以テ定ムベキハ勿論ナ
レトモ新附ノ外国人皇国貨幣ノ比較ヲ不辨ヨリ端銀

アリテハ筭當紛ラハシク兎到底セザレハ自然諸物
價ニ支障生ランモ計難シ端銀ヲ棄捐一元三十匁ノ
定價ト爲シ彼貨幣ニ疑ナカラシメン料ニ眞贋對照
ノ様式トシテ奥村在住セーボレショーグノ両人大
村在住シヨーレポーツンウイレムジョンフラホー
ウヱレムケレショーセフコルリニスノ五人ニ与フ
各様式貨ヲ分配シ交換テ互ニ分セ相其異違ナキヲ
會得セシ躰ニテ受納ム尔後マタ前ノ餘談ニ迂リテ
ジョージハ何歳ニ候哉
七十八歳ニ御座候

何れより渡来致し候哉
千八百五十三年亜国コモトールペルリ渡来之節此所ニ而残
り申候
其以前ハ何れへ罷在候哉
亜米利加合衆国海軍ニ十四年相勤罷在候
何乃為ニ当島へ残り留り候哉病氣之為ニ候哉
全く病疾之為御座候
亜国軍艦ニ而何役相勤居候哉
元初ハ水夫小頭相勤め其後亜国より日本之へ航海候
首水夫ニ相成其余ハ船中小役人相勤申候

本国ニ妻子等有之候哉

無御座候

當島ヘ相残候節ハ一人ニ候哉

仰之通ニ御座候

ケレハ何歳ニ相成候哉

廿七歳ニ御座候

當島ニ而出生致し候哉

左様ニ御座候

妻子ハ有之候哉

有之候



名前ハ何と申候哉

トキンニと相唱申候

何れ之島より罷越候哉

ウイレンタンと申島ニ御座候

何れ之方ニ向候哉

赤道直下より北緯四度ニ御座候

何国乃所領ニ候哉

何国之所領とも定り不申候

何頃渡来致し候哉

千八百五十五年婦人三人一同ニ渡来致し候

其余之商人ハ如何致し候哉
壱人ハジヨージウイレムと申ニ而米壱人ハ亜国鯨漁船マキレトジカツタ江乗組立去申候
何頃乃事ニ候哉
千八百五十九年ニ御座候
ケレハ小児幾人有之候哉
三男一女ニ御座候
ブラホーハ何ほとり相識且何歳ニ候哉
葡萄牙領ケイフワアク嶋とり相識四十八歳ニ御座候
妻有之候哉

三乙島出生之者ニテメレと相唱四十五歳ニ御座候
何頃渡来致し候哉
千八百三十二年同行五人ニ而相越申候
小児有之候哉
壱人有之則ジヨージウリレムと御座候
同行五人之内四人ハ如何致し候哉
商人ハ死去致し一人ハカレン乃妻并妹一人ハ立去申候
立去候ハ何比乃事ニ候哉
十ヶ年前英領ジスフ乃商船ニ乗組キウアーム島へ相越申候

カレンの妻ハ何と申候哉

三乙島出生ニ而ヘチヤと相唱ヘ申候

小児有之候哉

有之候

カレンハ何国之人ニ而いつ頃罷越候哉

英人ニ而千八百三十二年ニ相越申候

壱人ニ而相越候哉

ブラボー同船ニ罷在候

何歳ニ候哉

五十三歳ニ罷在候

ウイレムの妻ハ何と申候哉

ヤハリと相唱二十一歳ニ罷在候

右之者も同く此村ニ住居候哉

左様ニ罷在候

ペハレハ何村ヱ住居候哉

此村ニ住居致し居モレシと申者と同居致し居候

両人とも何れより渡来いたし候哉

ペバレハカナカヲテアハイテア島出生之者ニ而四十五歳ニ相成千八百四十八年モレシハ千八百五十四年セーボレ妻と同船致し罷越申候右之外カナカ人チヤルス並ドームデウヱスも居ケレニ

属シジョーセセウエレム又属し居都合五人ニ候事
此日もゼーボレへ申談候処凡百五十年程以前此方役人
當島巡見之節此村ハ大村セーボレ住居乃村ハ奥村ウエブ乃村
ハ酒寄村と名付置候儀ニ付以来左様ニ而可然候
此時村号ヲ記シ、一葉ノ書ヲ遣与スセーボレ受取
納ム其後
さいたひ三ヶ村とも無名ニ付唯今唱候間以来左様心得可申
申候
之義者相渡置候日本貨幣ハ全く此島限り通用便利之
為免相渡候儀ニ付渡来之外國船へ相渡候儀堅不相成

右等之規則一般極メ置候右候只今貨幣相渡候ニ
付先ツ酒之ニ申談置事ニ候
承当仕候
先之船之切開候地所巡見之節候箇所と指場ニ標木相立
ニ申候
依東西之仕候
亜国ニトルラルハ日本之何程ニ通用仕候哉
二歩ホとニ相當り候右日之相場変一定之價ひハ無之候ヘ共
當島限り此方ニ而取扱候と相定メ候
外（セーボレ）ニ御用無之候ハヽ旅舎ニ帰仕候

地面見分致し候ニセーボレ江居合候而差支無之候ハヽ田舎
致し候而も不苦候
方々所持之地も打交り居候
右様ニ候ハヽ後刻見分之積ニ候間其上ニ而田舎いつれニても都
合之宜候
承知仕候
カナカ人相雇候賃銀何程ニ候哉
壱トルラルニ御座候
一日乃食料何程ニ候哉
相雇候方ニ而食料取賄候而壱トルラルニ御座候

セーボレよりペルリへ売渡候地面ハ奥村之内ニ候哉
此程御艦御水夫之浴湯ニ致し候ゟ傍並ニ海岸通り
ニ御座候
何程ニ而売払候哉
此方より直段ニ申立彼方存寄次第差出候様申立候
知五十トルラルニ売払申候
右ニテ畢
是ヨリ大村住居ノジヨージ始メ各持畑アル者ハ其
地ニ至リ指テ告ク嚮導ニ引カレ畑地ヲ巡検スルニ
耕種荒蕪差相半(アヒナカバ)シ今所見(ミルトコロ)處皆耕作ノ地ニ非ズ抑大

村ハ當島大港ノ西岸ニシテ海ニ沿ヒ平坦ノ地最廣シ然レハ外国人モ此地ヲ開墾シ家ヲ造リト居スル者當村ヲ第一トス今英蘭等ノ者住宅ヲ構ヘ耕地ヲ持テリカナカ人ノ家屋モアリテ共ニ住居タレ𪜈是ハ自身ノ所有スル地ハナク他人ノ持地ヲ小作シテ居レル也総テ此地東ハ清瀬川ヲ隔テ奥村ニ接シ東ハ宮ノ濱ニ至リ奥村ニ疆ス宮ノ濱ハ延宝年間島谷市左衛門等巡視ノ時三神ノ御祠ヲ建立セシ所ナリ南ハ海口ニ至リ洲崎村野牛島ト斜ニ相對ス村ノ正面ニ一ノ岩アリ烏帽子岩ト号ク巡検畢リ各別レ帰レリ今年モ僅明日一日トナリ離島ニ三元ヲ待テ一行無恙テ此越年ス

先是同十五日越中守大久保忠寛小笠原島豫備船ノ事件ヲ再應建議シテ決ヲ請フ

小笠原島御備船之儀ニ付再應奉伺候書付

大久保越中守

小笠原島御開拓御用として水野筑後守服部帰一并誠候ニ付而者島之間之往復ニ相用一ヶ年中為見居候形御船致渡早〻御差廻相成候御備船ニ仕立方御同人々相伺置候處候形御船之儀者何も御修復中ニ付出來次第御差廻可相成右御船廻し方之儀者小笠原島着之上彼地之

模様申上候上蒸差廻しも差支有之間最前千秋丸蒸気船
帰帆之節申上候様可仕旨出帆前被仰渡候事ニ付右之趣候
然る処千秋丸蒸気船ヘ者彼地出開之品積載可差出積ニ而
品物搭載済ニ而満たる上帆ニ仕立千秋丸出帆之迅速ニ而抱
咸臨丸着船之上ニ而全島九十余之島嶼御開拓筋時宜ニ
応し夫々速ニ着手可申筈ニ付何れニも蒸気船不足ニ而ハ海路往
返差支候ニ付御備船之儀ハ急速御差廻し相成候方御開拓筋
捗取候一端ニも自然千秋丸帰着後ハ君沢形蒸気船御
差廻し相成候御備船無之候而ハ交通之間毎々来訴在島
仕候様之儀ニ而甚以可然哉ニ存候何卒御是非共君
沢形御船之内弐艘も御修復差急早々小笠原島御備船
ニ差廻し方可然旨外御軍艦奉行ニ被仰渡被下候様仕度旨
筑後守帰一条組之節申談候ニ依テ再応奉伺候以上

酉十二月

大久保越中守江

覚

君沢形之内六番御船江御軍艦組之もの為
乗組小笠原島ニ在留之内御船御修復出来之
上ハ御船造掛りより請取早々相廻し候様可被成候事

右之通御軍艦奉行江相達候旨一同被仰渡候事

同十九日江戸ニ於テ忠寛建白シテ去ル九日咸臨丸所用石炭ヲ始メ島々ニテ必用ノ諸品ヲ千秋船ニ積入レ差配トシテ支配同心一人ヲ乗セ小笠原島ニ航海サセシメン事ヲ請フ本日信行許可ス因テ同心藤本潤助ヲ乗組セ同廿日再左ノ書ヲ進達ス

鯨漁船ヘ御用物積込上乗差出候儀申上候書付　大久保越中守

近〻千秋丸与申船小笠原島ヘ相越候節咸臨丸御用石炭并島〻ニ而必用之品〻積込差出候ニ付右等差配方支配同心一人為乗組差遣相伺候處伺之通被仰渡候得共然ル處千秋丸之船ヘ石炭之外品々不殘積込艤出来候ニ付先般鯨漁開業之差許相成今般鯨漁稼としして小笠原島辺ヘ相越候越後国村松濱百姓安之允所持鯨漁船ヘ石炭之外荷引分ケ積込候ハヽ千秋丸之船ヘ積込候分ハ兼而軍艦方ゟ引渡右鯨漁船之方ヘ御用物積乗候ニ付船中取締としては右同心壱人上乗為致差出申候尤右船之儀別段運賃等請取不申冥加として御用物積請候儀ニ御座候依之此段申上候以上

酉十二月

同日支配調役並出役蜷川藤五郎同心金坂貴之助ノ
両人ヲシテ在江戸小笠原島掛リニ下令ス

同廿日再應用意金携帯ノ件ヲ許フ

用意金御渡方之儀ニ付申上候書付

洋銀五万枚　メキシコトルラル

大久保越中守

右者水野筑後守服部帰一ヶ伊豆國附島々御役向并小
笠原島御開拓御用意金之儀先般御渡有之候金高之
外書面之通千秋丸御仕出之節御渡有之候様仕度旨
申立茂有之右洋銀御渡之儀者疑被及御沙汰候後
伺済之上ハ先達而筑後守帰一ヶ再應申上候通今
般御用之儀者不測之孤島ヘ相渡航海之儀且漂流之患
無之とも難申且又御開拓之儀各国公使よりも御達有之候
上者民種引移方等後を争ひ候場合可有之哉も難斗候
開拓実地ニ臨ミ万一用意金不足いたし候為免手後れ候
様之儀有之候而者御国体を失ひ候儀者勿論役々之役差当候
御譴責も空敷相成候実以痛心仕候旨筑後守出帆以前委
敷申談並候儀も有之再應申上候者何とも奉恐入候得
共書面洋銀御渡之義者實等申上候通何卒とも千秋
丸出帆以前御渡御坐候様仕度此段奉願候以上

丙十二月

覚

書面洋銀五万枚請渡之承状之事

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan